

ロックマンゼロ(偽)奮闘録

RE : 引きこもりたい…！！

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なんか知らんけど寝て起きたら伝説になってたし死に戻り出来る様になった。よく分からんけど取り敢えずシエルさんのために戦う所存。

目次

Re:ゼロじゃないんだから…	1
まさか、これが恋…?	9
レジスタンスベースを探索するぜ!	18

Re：ゼロじゃないんだから…

Mission start

気が付いたら目の前に銃を持った青いロボットが複数いた件。
更に言うとは背後に金髪の少女がいる。何でこんな事になってんの？俺は確か学校が終わったから夕飯まで部屋のベッドで昼寝をしていた筈なんだけど…。

「ゼ、ゼロが…、復活した…」

ゼロ？俺はゼロなんてカッコいい名前じゃなくて……ってあれ？名前、何だっけ？やばい、全然思い出せんから沈黙しか出来ねえよ。多分今吹き出しがあつたら「………」こんな感じになってるわ。

「…ゼロ？助けて……。お願い、助けて……！」

……ハイ？助けてって、まさか俺にあの青いロボットと戦えと？無茶をおっしやいますな金髪少女や。俺は戦闘経験なんて弟と喧嘩したぐらいしかない一般ピーポーなんだよ？銃持った相手に勝てる訳ないやん？でもヤバい状況なのはなんとなく分かる。どうしたものか…。

「危ない!!」

えっ？と思いつき振り返ると青いロボット達が銃を構え一斉に発射していた。弾丸が目の前に迫り、これは避けられないと悟った。その時、俺の頭を過ぎる走馬灯。あつ、もしかしたらこの走馬灯で俺の名前を思い出せるかもなんて呑気な事を考えながら走馬灯を見る。

『ゼ、ゼロが…、復活した…』

『…ゼロ？助けて……。お願い、助けて……！』

『危ない!!』

……ってこれっさいさつき起きた出来事じゃねえか!!再放送にはまだ早すぎ

Mission failure

M i s s i o n s t a r t

気が付いたら目の前に銃を構えた青いロボットが複数いた件。

……いや、なんでやねん。ちよつとお待ち。俺今撃たれたよね？見るも無惨に全身を撃ち抜かれたよね？最後にチラツと見えた金髪の少女の全てに絶望したような顔が忘れられないよね？なのになんどここに戻ってんの？あれか？死に戻りってやつなのか？Re：ゼロじゃねえんだから死に戻りなんてやめて下さい。確かにゼロって呼ばれてたけども！

……いや、一旦落ち着いて状況を整理しよう。まず俺は『ゼロ』と呼ばれる人物になっていて、金髪の少女に助けを求められている（よく見るとかなり可愛い）。そして目の前には銃を持った青いロボット。定石通りに考えれば恐らくここを突破する事が俺のやるべき事で、それが出来ない限り俺は何度でも死に戻り続ける筈。

…俺一人でどうしろと？しかもこの金髪美少女を守りながらでしよ？無理ゲーじゃね？いつその事このまま逃げ出したいけど…。

「…ゼロ？助けて…。お願い、助けて…！」

……こんな泣きそうな顔でお願いされちゃうとな…。それにさつき俺が死ぬ前に見えたあの絶望顔もかなり心が痛んだし。……しやあない。俺一人で何が出来るか分からんけども!!
やっつてやろうじゃねえK

M i s s i o n f a i l u r e

M i s s i o n s t a r t

気が付いたら目の前に銃を持った青いロボットが複数いた件。

人が決意を固めた瞬間に襲い掛かってくるんじゃねえよ!!お前それ魔法少女の変身シーンの時に攻撃を仕掛けるのと同じくらの

ルール違反だからな!!

ふう…。さて、気分も少し落ち着いた所でどう対処するか…。目の前には青いロボット達。そして更に奥に道が続いている事から敵はまだいる可能性大である。加えてこちらは戦闘経験ゼロのゼロ(仮)と金髪美少女さんのみ。改めて考えると絶望的である。せめてこちらも何か武器があれば…。っと思っていたらいつの間にか俺の手にハンドガンが握られてる!?!よく分からんけどこれで勝つる!!

手に持ったハンドガンを青いロボットに向けて…。撃つ!!撃つ!!鬱!!あつ、漢字間違えた。しかし俺が撃つた銃弾は寸分変わらず青いロボットの顔面に直撃し、破壊した。俺のエイムも中々である。しかしここにおいてもまだまだ敵は湧いてくるだろう。危険だが奥に進むしかない。という旨を金髪美少女に伝えなくては。へーイお嬢ちゃん!俺が守るから先に進もうZ!!…。いやナンパじゃないよ?この軽い口調で少しでも緊張を解せたらって思ったただだよ?。

「……敵を残滅しながら進む。ついて来い」

「う、うん…」

……つてあるえ?何か口調がクールになってる?まさかの自動変換機能搭載である。やめて、勘違いされちゃう。俺の事めっちゃ強い人だっと思われちゃう。既に二回死んでるんです私。

くう…。思わぬ誤算に心が追い詰められるが何とかやるしかない!最大限警戒しながら突き進む!!

敵を倒しつつ先に進む道中で気がついた事がある。それは俺の身体が凄い性能をしているという事だ。跳べば数メートル以上高く跳べるし落下ダメージも無し。動体視力も上がっているのか複数人の相手の動きが良く見える。更に残像を残す勢いでダッシュをする事が出来る。どうやら俺はなろう系転生者になってしまったようだ。

しかしそのお陰でこの窮地を乗り越える事が出来ている。圧倒的感謝!……:ていうかそんな凄い状態の俺にしっかりとついてくるこの金髪美少女は何者?俺が壁を蹴りながら登った結構な高さの段差も軽々乗り越えてきたし。その気になれば俺より強いのでは?

なんて考えている間に一番奥の行き止まりまでやって来た。あれ？
出口何処？

「あつ、行き止まりになってる…。どうすれば…」

まさかの出口崩壊である。ヤバくね？その時突如訪れる地震。そのせいで金髪美少女がいる足場が崩れそうだ！俺は残像を残すスピードのダツシユで彼女の元へ向かい、抱き上げる。セクハラ扱いされませんように！しかし足場が崩れてしまったので彼女の負担にならないようにしつつ着地態勢を…。って、高い高い!!いくらダメージはないって言っても元普通の人間からしたら怖いんです。ジェットコースターの10倍は怖いわ!!

しかしそんな動揺も一切見せる事はなく楽々着地(しているように見えて内心心臓バツクバク)。どうやらお互い無事のようにだ。

「あ、ありがとう…」

いえいえどういたしまして。てか顔を赤らめて可愛いなおい。なんて言葉も出ないこのボディ。コミュ障か。いや、クールキャラ？もう何でもいいや。

「どうやらここは前時代の研究所のようね。もしかしたらレジスタンスベースへ戻れるトランスサーバーがあるかもしれないわ」

???レジスタンスベース？トランスサーバー？何それ知らない。いや、レジスタンスベースは何となく分かる。彼女の住む場所なんだろう。でもトランスサーバーってなんで？なんて考えている間に奥に進んでいく金髪美少女。おいおい一人は危ないぜ？

「ダメだわ…。崩れちゃってる。戻りましょうか？」

うゝむ。正直戻った所で出口があるとは思えんけど、彼女がそうしたいなら俺はそれに付き合っ…って危ない!?

「下がれ!!」

「キヤアツ!?!」

咄嗟に出た言葉も意味を成さず奥から壁を破壊しながら現れた巨大な手に金髪美少女は捕らえられてしまった。おのれ許さん。すぐさま捕まった彼女を追い掛ける。

…その先には、俺の身長を遥かに超える巨人のような巨大ロボット

がいた。その日、人類は思い出した……。

「ダメ…、早く逃げて…。こいつにはバスターが…」

なんてふざけてる場合じゃないな。許さんぞこのデカブツ野郎。
金髪美少女を返してもらおう!!

WARNING

取り敢えず彼女に当たらないように撃つ。弾かれた。ならばと壁を蹴り登り、頭部を狙う。ちよつと効いた？分らんけどここ狙うしかないな。なんて思ってたら口から緑色のレーザーが発射された!?! 咄嗟に下に降りて事なきを得たけど危ないな!?!この野郎…、次はこっちのb

Mission failure

…その先には、俺の身長を遥かに超える巨人のような巨大ロボットがいた。

WARNING

…相手のレーザーのせいで発生した落石にプチつと潰された…
だど!?!なんて間抜けな死に方、恥ずかしい!しかし相手の攻撃パターンは分かった!レーザーとその後の落石に注意すれb

Mission failure

…その先には、俺の身長を遥かに超える巨人のような巨大ロボット

がいた。

WARNING

……だよね。そりやそんなでかい凶体だもん。突進して来た方が強いよね。しかしこれで今度こそ相手の攻撃パターンは予測出来た。今度こそやってやんよ！

先ず最初と同じように壁を登りつつ銃を頭部に放つ。レーザーを撃つてきたら下に降りて躲し、落石も気を付ける。突進してきたら壁をギリギリまで登って躲す。これでなんとか戦えているけどこっちの攻撃は殆ど効いてない。加えてこっちは一撃でも喰らえば終わり。クソゲーかな？

「チツ…」

あまりの理不尽に自動変換機さんも舌打ち。でも本当にどうしよう？銃だと火力不足だし、このまま避けててもジリ貧だ。あれ？詰んだ？

「……ん？」

なんて考えていると突然モニターが光だし、そこから一本の棒……。いや、レーザーブレードだこれ！急にレーザーブレードが飛び出してきた！

「…ゼロ、コレヲツカツテ…」

誰ぞ!?

「誰だ！」

「ハヤク…、カノジヨヲタスケナイト…、サツ、ハヤク…」

よく分からんけどありがとう謎の光さん！渡されたレーザーブレードを手取る。って凄いなこれ！滅茶苦茶手に馴染むわ！まるで長年使い続けてたみたいだ！これならいけそうだ！

巨大ロボットがレーザーを撃つてくる。それを見た俺は何度もやっている壁登りで天井付近まで登って回避。そしてそのまま壁を蹴って奴の頭部に飛び移る。そしてすれ違い様に…！

「セヤア！」

頭部を切り裂く!!それだけで巨大ロボットは機能を停止。金髪美少女を掴んでいた腕も落ちて今にも爆発を起こしそうに……つてこのままじゃ彼女が危ない!!瞬時に彼女の元に駆け寄り、爆発に巻き込まれないようにその場を離れる。その際に余波などが当たらないように彼女を背に隠す。フツ…、完璧だぜ。

M i s s i o n c o m p l e t e d

……なんか頭に文字が流れた気がする。M i s s i o n c o m p l e t e d?これで終わりつて事?よっしゃあ!何とか金髪美少女を守り抜いたぜ!……いやマジで疲れた…。死に戻りなんてフィクションで楽しむもので実際にやるもんじゃないな。スバルパイセンマジリスペクトツス。

「ゴーレムを倒してしまっうなんて…。やっぱりあなたはあの伝説のゼロなのね?」

えっ?伝説?俺が?いや知らないけど。俺自分の名前も知らないし。

「ゼロ?俺の名前…か。………うう…、思い出せん…」

「長い間眠っていたみたいだから仕方ないわ。…無理やり起こしてしまつてごめんなさい…」

えっ?そんなに寝てたの?夕飯までの昼寝のつもりだったのになだけ寝たらこんな状況になる訳?

「それと、助けてくれてありがとう。私はシエル。こう見えて科学者なの」

金髪美少女改めシエルさんはニッコリ笑いながら自己紹介をしてくれた。うん、可愛い。てか科学者なの?その若さで凄いな。…はっはくん?読めてきたぞ?恐らく先程の敵はシエルさんの優秀な頭脳を狙つて襲い掛かつて来たんだな?なんとという極悪非道、許せん!!

…でもなあ、俺、多分本物のゼロじゃないんだよね…。中身こんなだし。シエルさんをガツカリさせないかな?

「さっ、敵が来る前に私達のベースへ!」

「…俺がそのゼロじゃなかったらどうする？」

ちよい待ち自動変換さん？何口走ってんの？あれなの？ちよつとでも頭の中に考えたら直ぐ口に出しちゃうの？お口チャックしちゃうよ？いや俺の口だけでも。

「私にとつては貴方はもうゼロなのよ」

シエルさん…!!なんて良い人なんだ…!!本物じゃないかもしれないのに俺の事を信じてくれるだなんて…いよし、俺この人について行く！正直また死に戻るかもだけどこんな良い人を見捨てるなんて俺には無理だよ出来ないよ！

「運が良かったわ、トランスルームが生きてる！」

シエルさんと一緒に部屋の中に入ると見慣れない機械が置いてあった。あれがトランスサーバーなのだろうか。

「上に立って機械を作動させればベースに帰れるわ。さあ、早く！」

言われた通りに機械の上に立つと、シエルさんは慣れた手つきで機械を操作しだした。すると機械が動き出し、俺の視界は真っ白に包まれた。あつ、これもしかして転移装置？やべえ、さつきのロボットといい、完全にSFの世界じゃん。

——こうして、俺の死に戻り奮闘記が幕を開けた…。

…女の子の為に死に戻りするとかRe：ゼロじゃないんだから…。

まさか、これが恋…？

以前シエルさんを華麗に助けた（四回死に戻りした）後、彼女が住むレジスタンスベースへとやって来た。所々老朽化していてボロい所もあるけどそれが秘密基地感があってテンション爆上がりですわ。…まあ、表情筋動いてないんだけどね。どうした？笑えよ俺。

M i s s i o n s t a r t

…：なんて考えていた時期が私にもありました。

知ってるか？俺今ベースに着いたばかりなんだぜ？なのにもうミッションに行ってるんだぜ？笑えるだろ？どうした？笑えよベジータ。唐突過ぎて訳分からんけど今まで得た情報を整理すると…、

・レジスタンスベースはネオ・アルカディアの統治者であるエックスからイレギュラーの疑いを掛けられたレプリロイドの最後の砦。
・ネオ・アルカディアは人間とレプリロイドの理想郷。だが統治者であるエックスのイレギュラー判定が厳し過ぎる。

・無実の身で破壊されるレプリロイドを助ける為にシエルさんはレジスタンスベースを設立。

・ネオ・アルカディアと戦いを続けていたが限界を感じ、状況を打破する為に伝説のレプリロイドであるゼロを捜索し、発見した。

- ・ゼロ（俺）は伝説のレプリロイド。
- ・ゼロがいれば皆を助けられるかも！助けて！
- ・俺『任せてちょんまげ』自動変換さん「ああ」
- ・ありがとう！じゃあ早速とある施設を破壊してきて欲しいの！
- ・ゑ？↑今ここ

後半端折ったけどこんな感じ。どうやら俺が考えた《シエルさんが優秀な科学者だから敵に狙われている説》は外れたみたい。

ちなみにレプリロイドって言うのは人間そっくりなロボットの事で、イレギュラーって言うのが人間に危害を加えるレプリロイドの事

らしい。

そして俺はかつて伝説と呼ばれしレプリロイド、ゼロ！伝説のレプリロイド、ゼロ！！

うん、伝説って響きがいいね。ポケモンでも伝説っていうのは強いもんだ。ザシアンとかカイオーガとかイベルタルとか黒馬バドレックスとか。今伝説厨とか思った奴、後で体育館裏な。

さて、時を戻そう(話を戻しましょう)。シエルさんを助けると決めた俺は早速彼女のお願いでレジスタンスの仲間を次々と処分していき、という施設を破壊しに行くのだ。ベースに来て直ぐにミッションとかしんどいなんて事は言わない(思っていないとは言っていない)。

こうしている今でも無実のレプリロイド達が破壊されそうになっているのだとか。おのれ許せん。殺るなら極悪人だけにしろ！！

という訳で冒頭に戻る。処理施設を破壊するミッションが始まった。

《処理施設はその先よ。お願い、皆を助けて！》

通信機から聞こえるシエルさんの声は切実な想いが込められている。そんな真剣に言われちゃ断れんぜ！この伝説のレプリロイド(仮)に任せとけい！！じゃっ、行って来まーす！！

処理施設を目指してダッシュで駆け抜ける俺。途中出てくるタイヤみたいな奴や以前見た青いロボットが行手を阻むが問題なし！以前謎の光さんに貰ったこのセイバーで真つ二つだオラア！！

フハハハッ！！最高だ！！気分は無双ゲームの主人公だ！！このままゴールまで一気に走り抜けてy

M i s s i o n f a i l u r e

M i s s i o n s t a r t

……なんて考えていた時期が私にもありました。

……いや、あそこにトゲがあるのは聞いてないって……。前方不注意でトゲに落ちたのは俺が悪いけどあそこにトゲがあるのは聞いてないって……。

くそう、あのトゲのせいでスタートからやり直しだよ！シエルさんの切実なお願いがリピートされたよ!!

駄菓子菓子、この程度で諦める俺ではない！一度失敗したのならその次を気をつければいいのだ。前方の敵だけではなく、地面のトゲにも注意しつつ進む。これで突破出来る筈だ。

道中は一回目と同じように無双ゲームをしながら進み、トゲ場はダッシュしながらジャンプで跳び越える。取り敢えず前回の関門突破である。ドヤりたいけど別に大した事はしてないのでそのままどんどん進む。

途中でボロい建物が建っているがお得意の壁蹴りで登って行く。……ハッ!?登ったという事は……、降りなければならぬ……?天辺まで登ったからかなり高いよね……?

……思った通りだよ。めつつつちや高いじゃん!!軽く三回は死ぬる高さだよ!!俺高所恐怖症なんだよ!!ジェットコースターとかNGなタイプなんだよ!!えっ?死ぬ方が怖いだろうって?……そうだけど!!

ああ……、嫌だなあ……。でも、ここ降りないと進めないよなあ……。ずっと立ち止まってたらシエルさん心配させちゃうし……。

……よし、覚悟を決めた!先ずは心を落ち着かせて……、今だ!!俺は鳥になる!!紅蓮天翔ー!!!えっ?ちよ、空から来るとか聞いてない

M i s s i o n f a i l u r e

M i s s i o n s t a r t

……なんて考えていた時期が私にもありました。

鳥になろうとしたら既に鳥になっていた青いロボットに背中を撃たれたでござる。何あれ羨ましい。帰ったらシエルさんに俺も空を飛べるか聞いてみよ。あつ、でも高い所怖いからやめとこ。

ていうか今更ながら俺の耐久低くね？ちよつと撃ち抜かれただけで御臨終とか。なのにスピードもパワーもあるとかフェローチエかよ。：今回はポケモンネタが多いな…。

墮我誌画指！この程度で諦める俺では以下略!!何度も同じ所を書くのはめんどくさいもとい、分かりきっているから省略してなんとか前回やられた所まで戻ってきた。

そして…、フツフツフ…、空から来る事がわかっていれば問題は無いのだよ。降りてきた所を叩き斬る。あれ？一回じゃやられない？ならもう一回だ、ダメならさらにもう一回だあ!!三度目の正直で今度こそ空飛ぶ青いロボットを破壊。もしかしたら自分よりも耐久値が高いのではと若干落ち込むけど気にしない。

…さて、そろそろ本番だ…！そう、紐なしバンジーの時間である。くつ、前回は心を落ち着けた瞬間に襲われたからな…。今度こそ俺は鳥になる!!うおおおおお!!

…特に危なげなく着地。そして降りてから思った。これ壁からズリ落ちれば怖い思いしなくてもよかつたのでは？まあ早くしないとレジスタンスの仲間がやられちゃうかもだからこれが正解の筈。

後の道中は特に変わった所もなく、トゲと敵に気を付けて突破。あつ、なんか無限に出てくる塔みたいな奴が結構な数いたけどちよつと斬った後に無視した。

そして今、俺はいかにも扉の前にいる。これ絶対この先が処理施設よな。

《処理施設はその向こうよ!》

シエルさんからGOサインを貰ったのでいざ参る!扉を開くとその先には…!!もう一つ扉がありました。扉の開けて直ぐ扉って何?俺の覚悟を返せと思いつつももう一つの扉を開く。

その先には白を基調とした鳥っぽいロボット…、じゃなくてあれもレプリロイドかな?がいた。腕のハサミみたいなのが気になって見

ていると鳥っぽいのがコチラに話しかけてきた。

「私は、四天王ハルピュイア様のご命令でスクラップ共を始末しているアステファルコンだ」

いや別に自己紹介求めてないんでいらねっす。てかスクラップって何だゴラア!!シエルさんのお仲間様に失礼だろうがF—Z E R Oパイロット野郎テメエ!!

「ああー助けて、助けてくれえ〜!!」

悲鳴が聞こえて下を覗いて見るとレジスタンスの服装を着ているレプリロイドが助けを求めていた。よく見ると今俺が立っている所の真下がトゲだらけだ。これでレプリロイドを処理するのだろうか?でもこれ足場になってるし一瞬で落ちる訳じゃないだろ?ゆっくり焦らすように処理するとかお前、わざわざこんな恐怖を与えるような事を…!!お前ら人間じゃねえ!!

「……わざわざ恐怖を煽るか。悪趣味だな」

「フフツ、お前もあのスクラップ共の仲間だな?ついでに処理してやろう。お前の言う悪趣味な装置でな!」

WARNING

戦闘が始まったと同時に足場が下に降りていく。くそ、早く倒さないと下にいるレプリロイド君が危ない。速攻で叩き斬る!!

ダッシュでファルコンに近付き、セイバーを振るう。しかし、ファルコンは高く跳び上がりこれを回避。壁に張り付きながらハサミっポイのから雷の矢を発射してきた…って、危なっ!!慌てて回避したけどまさかでんきタイプだったとは…。あつ、あの腕の奴ってレールガンってヤツか?くそ、属性攻撃とかずっこいぞ!!

とか考えている間にファルコンは床に着地し、レールガンをこちらに向け、再び雷の矢を放ってきた。おい、高低差つけて放つのやめろ避けづらいだろ!!

ええいこうなりや一か八かだ。雷の矢をダッシュジャンプで避けつつ、相手に接近してセイバーで斬る!!タイミングをよく見て…、こ

こだ!!よし、先ず一撃与え……あつ、ちよ、挟むのやめt

M i s s i o n f a i l u r e

扉を開けるとその先には…、もう一つ扉がありました。

…ヤツは蟹か!!そして俺は蟹に挟まれる獲物か!!挟みながら電気流すのやめろ!!ビリビリしちゃうだろ!!

…ふう、少し落ち着いた。取り敢えず安易に接近しちゃダメだつて事はわかりました。次はハサミで挟まれないように気をつけないとな。

そういえば前もそうだったけどリスポーン地点つて変わるんだね。正直助かったけど。もう紐なしバンジーはやりたくない。まああんな事そんなに毎回ある訳じゃないだろうね（伏線）。という訳で再度お邪魔しますか。

…扉を開く前に思った事がある。どうせこの先に敵がいるって分かってるんなら不意打ちしてもよくね?うん、いい気がしてきた。だってまたアイツと会話するの面倒だし。そうと決まればやってやんよ!!ウイーン!!（扉を開く音）

「私は、四天王ハルピュイ」

んなもん知らんわ早速死ねえ!!

「知らん。セヤア!」

「ぐはっ!?き、貴様…、いきなり不意打ちとは…!?!」

うるせえ!!こちとらレジスタンス君の命が懸かっとなじやい!! さっさと死に晒せや!!

「お前はこの処理施設を管理する者だろう?こちらはレジスタンスのメンバーの命が懸かっている。悪いが時間を掛けるつもりはない」
《ゼロ…、私たちの為にありがとう…》

「わ、私の為にそんな…、か、感激です…!」

普通に不意打ちしたと畜生なのに自動変換さんのおかげでなんかめっちゃカッコいい人になっちゃまったぜ。シエルさんとレジスタン

ス君の好感度が鰻登りだ。なるほど、これが勘違い要素か…!!

それよりさつきの不意打ちは効いたみたいだ。ファルコンは片膝をついてるざまあみろ。…今俺(ゼロ)の中身が皆に知られたら軽く死ぬるような事考えてるや…。

「ぐうう…：ならばもはや言葉はいらん!!貴様もこの場で処理して…」

あつ、そういうえばハンドガン改めバスターショットがあつたの忘れてた。相手が体制を立て直す前に撃っちゃれ。バンバン!!

「隙有りだ」

「ぐふう…?!貴ツ様アアアア!!!」

ブチギレてて草生えるわwww。しかし、ここからが本番。相手の動きをよく見て避けて、斬るor撃つ!落ち着いていけば勝てる筈!第二ラウンド開始だオラア!!

WARNING

「死に晒せスクラップがアアア!!!」

一回目の時そんな口悪くなかったじゃろお前。いや、俺が悪いんだけど。でもそのおかげで雷の矢の動きが単調になつて避けやすい。フハハハツ!!不意打ち作戦は大成功だな!!(内心ゲス顔)

このまま雷の矢を撃つても埒が開かないと判断したのか、ブチギレファルコンは腕のレールガンを大きく開き……って吸い寄せられる?!電磁石とかやめろや!!とりまダツシユで逃げる!!あつ、吸引力が弱まった。吸引力の変わらないダイ○ンの掃除機以下だったようだ。

「チイツ!!だったらこれでどうだ!!」

今度は壁に張り付いて床に向けて雷の矢を散らすように放つ。フツ、それは悪手だぜ。一度見たからなあ!!

壁に張り付こうとした瞬間が見えていた俺はその瞬間にダツシユで相手の足元まで移動。そして、下からセイバーで斬り上げる!!

その攻撃に耐える事が出来なかったファルコンの身体は真つ二つとなった。

「ば、馬鹿な…、この私が、こんな卑怯者…：…に…：…」

やがてファルコンの身体は火花を散らし始め、盛大に爆発を起こした。卑怯者言うなや。勝った方が正義なのだよ（充分卑怯者）。

それを見届けたと同時に床の下降が止まったのでこの床を破壊して下に降りる。どうやらレジスタンスの彼は無事らしい。よかったよかった。

「ハハ…：…ありがとう、まさか助かるなんて思っていました！」
「でしようね。こんな所に落とされたらもう絶望しか無いもんね。助けられてよかったわマジで。何回も死んだ甲斐があつたというもんよ！」

「本当に、本当にありがとうございます!! 敵に不意打ちをしてまで私を助けようとしてくれた事、心から嬉しく思います!!」

ワオ、凄く好印象。只アイツと話をするのが面倒だっただけなのにね。…アイツには、悪い事したな…。さらばだアステファルコンよ…。次会う時はツンデレJCになってレールガンをコインで撃てるようになるがいい…。

「私はまだ足がすくんで動けません…。ハハハ…」

そりゃあんなに怖かったらそうなるよね？大丈夫？私の肩空いてますよ？

「手を貸すか？」

「いえ、歩けるようになったらベースに戻りますので大丈夫です。貴方は先に行って下さい」

あつそう？なら良いけど。まあもう敵も居ないだろうからゆつくり戻つて来なよ。

M i s s i o n c o m p l e t e d

《ゼロ、ありがとう…》

ミッションコンプリートの文字が脳裏に過ぎると共にシエルさんから通信が来た。声を聞く限り心の底から安堵している様子だ。ええんやで。美少女の為やったら例え火の中水の中…：…これ以上言っ

たら楽曲コードが必要になりそうだからやめとこう。

あつ、そういえばあのなんちゃらファルコンを倒した時になんか拾ったんだけどこれ何ぞや？シエルさん分かる？

「シエル、敵を倒した時に何かを拾った。これが何かわかるか？」

《それはサンダーチップね。それを使えば武器に電気属性を付与出来るわ。持って帰って来てくれたら貴方にも使えるように調整するわ》

へえ…、アイツが電気使ってたからかな？よく分からんけど便利なもん拾ったわ。やったぜ。そしてありがとうシエルさん！流石科学者だぜ！今すぐ帰りまーす!!

「分かった、これは持ち帰る。これより帰投する」

《ええ、待ってるわ》

この先にトランスサーバーがあるようなのでこれを使ってベースに帰る。ようやく一息つけるな…。

…今回も色々あってめっちゃ疲れたけど、シエルさんの為ならなんでも出来ちゃうなあ…。ハツ!?まさか、これが恋!?

…俺今レプリロイドだけど、人間と恋ってしていいの？いや、恋とかどうかはネタだけどね？

レジスタンスベースを探索するぜ！

処理施設を破壊してからシエルさんに少し休んでいてくれと言われたのでレジスタンスベースを探索する事にした。まだちゃんと見てなかったしね。そうと決まれば行くぜい！

「あつ、ゼロさん！お疲れ様です！」

フツ：、やはり俺は有名になり過ぎたようだな。少し歩くだけで話しかけられるとは。これからはサングラスとか着けて変装すべきかな？うん、似合わんな。とりまファンサービスでちゃんと返事ぐらいはしないと。君もお疲れ様！これからも皆で頑張っていこう！じゃあまたね！

「ああ」

おい自動変換テメエ。俺の渾身のファンサをたった一言で済ませてんじやねえよ。愛想が悪いって思われちゃうだろ。あつ、でも小ちやい声で「クールでカッコいい！」って言ってくれてる！ナイス自動変換さん！（掌くるくる）

さて、まず初めにどこに行こうか。そういえばさっきシエルさんからエスケープユニットなる物を貰ったっけ。セルヴオって人が作ってくれたとか。つまりそこに行けばおもしろい発明品あり？行くっきやねえ。しかし問題点がある。

……技術室ってどこぞ？

ま、まあ探索がてら適当にエレベーターで降りていこう。今いるのが地下二階だから…、よし、とりあえず上に参りまうす。ここに技術室があるのかな？それとも他のメンバーの人がいるのかな？

…ハッ!?あ、あれは…、まさか…?!金髪幼女(ぬいぐるみ付き)だとお!!

「はじめまして！あなたがシエルお姉ちゃんを助けてくれたの？私の名前はアルエット！シエルお姉ちゃんがつけてくれたんだよ！」

こちらを見つけるとトテトテと走り寄って来た金髪幼女事アル

エツト。うむ、可愛い。全く、小学生は最高だぜ!!小学生かどうか知らんけどね。

「このぬいぐるみはシエルお姉ちゃんが作ってくれたの!私の宝物なんだよ!」

ほう?シエルさんはぬいぐるみも作れるのか。凄いなあの人。科学者でこんな女子力高い物まで作れるとか最強かよ。ちよつとほつれてるけど大事にしてるんだろなあこれ。

それにしても、イレギュラーの疑いを掛けられたレプリロイド達の最後の砦にこんな可愛い子がいるなんて……、待てよ?という事はこの子もイレギュラー判定を受けたという事か?

……おのれネオ・アルカディア:!!許せん!!!

YESロリータNOタツチの信条を知らない紳士の風上にも置けないネオ・アルカディアに怒りを燃やす。

「そういえば私まだあなたのお名前聞いてない。あなたのお名前はなに?」

おつと俺をご存知でないかい?ならば聞かせてしんぜよう!遠からん者は音にもk

「…ゼロだ」

おい待てや自動変換テメエ。俺まだ名乗り上げの途中なんだよ。せめて最後まで言わせてくれ。

「これからもよろしくね、ゼロ!」

ぐはあっ!?!か、可愛過ぎる:?!?こんな子によろしくされたら嬉し過ぎて思わず死に戻っちゃうだろ!そしてまたアルエツトちゃんに会ってよろしくされて死に戻る:あれ?無限ループ?しかしそこは根性で耐える!アルエツトちゃん、これからもよろしくね!

「ああ…」

いつもの自動変換さんがドライな対応をしつつ内心名残惜しいけどその場を後にする。英雄はクールに去るぜ:。

取り敢えず地下一階に技術室は無かったので地下三階に……:はトランスサーバーしかないからいいや。地下四階に参りまくす!ここには:むっ、おじいちゃんレプリロイドを発見!ゲームとかだところ

いう人にとんでもない奥義とかを教えてもらえる展開とかあるよね。よし、話しかけよう！

「おおつ、新入りじゃないか。先輩達に追い付くよう頑張っているかい？」

ウツス！頑張ってるツス！実力でいえば（耐久以外）最強ツス！

「なあ若いの…、ワシの話を聞いてくれるかい？」

おおつ！まさか本当に奥義を教えてくれるのか!?喜んで聞くツス
師匠!!

「ああ、いいだろう」

「そうか聞いてくれるか…。ありがたい…」

さあさあ、早く奥義をハリーハリー!!

「こう見えてもワシは2枚目のレプリロイドじゃった。だから中にはワシに惚れる人間の娘もおったんじゃ」

……おや?なんかもう思ってたのと大分違う話が始まってるぞ?

「そう…、あれは満月の晩のことじゃった…。ワシが港の倉庫で荷物を運んでいると波の音に混じって歌声が聞こえてきたんじゃ」

あつ、これ奥義を知ってる師範とかじゃねえわ。只の話すのが好きなおおじいちゃんだったわ。俺長話苦手なのに…。おのれデイケイドオオオオ!!!

「ふとそちらに目をやると髪の長い美しい娘が（くっそ長いので省略）

だからワシはシエルに頼んで年寄りの姿に変えて貰った。彼女と同じ時間を分かち合えるように。彼女はもういないが二人の思い出はワシの記憶チップから消える事はない…」

な、なんていい話なんだ…!!長話苦手とか言っでごめんおじいちゃん!やはりどんな人にも歴史があるんだな…。人じゃなかったわ。

「年寄りの長話に付き合わせて悪かったな」

や、こつちも良い話を聞かせて頂きありがとうございます!師範とかじゃなくて残念とか思ったけどそんな事なかったツス!!ありがとうございます!!また何か話があったら聞かせて下さいツス!!

「いや、これくらい構わない」

「ホッホッホ…。そうかい。ならまたワシの話に付き合ってもらおう

かの」

「機会があればな」

おじいちゃんレプリロイドと別れを告げる。いや、本当に良い話を聞いた。さて、そろそろシエルさんの所に戻って…。って、あれ？何故ここにシエルさんがいますのん？

「シエル。ここで何をしている？」

「えっ!? あっ、ぜ、ゼロ!?!」

めっちゃ慌てるの可愛い。こういう所は科学者って言っても年相応な感じだわな。

「……ねえゼロ」

何ですの？

「どうした？」

「貴方は何故私達を助けてくれるの？」

誰かを助けるのに理由があるかい？（ジタン風）まあ強いて言うなら自分の心に従ったままでさ…。

……なんか恥ずかしくなってきた。自動変換さん、なんか良い感じに訳して下さい!!

「俺がそうすべきだと思ったからだ」

修か!! 持たざるメガネか!! 俺言ったのFF!! お前言ったのワートリ!!

「そう…。貴方にとって私達はイレギュラーではなく、守るべき対象なのね…。ありがとう、ゼロ!」

俺の返答に笑顔で感謝を述べるシエルさん。守りたい、この笑顔…。取り敢えず安心してくれたみたいでよかった。

…それもそうか。よく考えれば周りの人達は皆レプリロイドで人間はシエルさん只一人。そして勝ち目なんか殆どない戦いに身を投じていた。

そんな中ようやく見つけた希望であるゼロ。もしゼロがレジスタンスの皆をイレギュラー扱いしたなら? そんな不安中にはあったのだろう。

……うん、正直言うとなんで俺がここにいるのかとか全く分からない

し、自分が何者なのかも分からないけど、やりたい事は分かった。

「シエル」

「??」

俺は、

「安心しろ、俺がお前達を助けてやる」

この何処までも優しい女の子の笑顔を守りたい。

「……まだミツシヨンが残っているだろう。行くぞ」

「……ええー！お願い、ゼロ……！」

その為に何度でも戦おう。何度でも死に戻ろう。そして、レジスタンスベースの希望の光であり続けよう。……あれ？なんか俺、厨二っぽい？まあいいや。よし、そうと決まれば早速ミツシヨンだ！張り切ってやってやんよ!!

……あつ、技術室に行くの忘れてた。